

長江中流域新石器時代の集団構造

宮本，一夫
九州大学比較社会文化研究科日本社会文化専攻・比較基層文明講座

<https://doi.org/10.15017/8575>

出版情報：比較社会文化．2，pp.95-108，1996-02-20．九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

長江中流域新石器時代の集団構造

宮 本 一 夫*

キーワード：長江中流域，新石器時代，集団構造，城址遺跡

1 はじめに

長江中流域の新石器時代は、城背溪文化→大溪文化→屈家嶺文化→石家河文化へと変遷する編年が考えられている。これらの変遷は、一つの系統的な文化変遷であって、多少の分布範囲の拡大縮小を伴いながらも、長江中流域は新石器時代を通じて一つの文化的な地域的まとまりとして認識されている⁽¹⁾。ところで『史記』などの文献によれば、伝説上この地域には三苗という部族が存在したことになっている。しかも伝説によれば、三苗は五帝の一人の舜や夏王朝の創始者である禹によって攻められ、滅ぼされたとされる⁽²⁾。『史記』の「五帝本紀」や「夏本紀」に記載されている五帝の時代や夏王朝の存在は、文字資料の裏付けがないことから、明確に証明されているわけではない。しかし、甲骨文字や金文の内容からその存在が証明された殷王朝は、すくなくとも地理的な位置から中原にその基盤が存在している。伝説上、殷王朝に先立つ夏や五帝は、その血族的な連結からも、中原を基盤として、時間軸を通じて系統的に存続する部族である。いわば、殷代以前の中原に居住していた夏華系部族が、五帝や夏であったとすることができる。その五帝の一人の舜や夏の禹に攻められたとされる三苗は、長江中流域に存在した部族であり、殷代以前であることから、新石器時代の長江中流域に居住していた人々である。さらにいえば、三苗すなわち長江中流域の新石器時代文化は、夏華系部族すなわち中原の新石器時代文化と何らかの接触をもっていたといえよう。と同時に、夏華系部族にとって長江中流域は対立的な存在であったとみることができる⁽³⁾。『史記』の「五帝本紀」などの記載は、いわば夏華系部族の伝統を引く殷王朝や周王朝の史観に基づいて作り上げられたものであり、夏華系部族に攻められた三苗は悪であり、非をもって滅ぼされたと記載されている。これは三苗の存在が当時夏華系部族にとってそれほ

ど脅威的であることを示すとともに、勝ち組である夏華系部族の史観が反映していると考えることができよう。事実、三苗に対比できる長江中流域の新石器時代には、城壁に取り囲まれた城址が今のところ中原地域より早い時期から出現しており、その先進性が注目されているところである⁽⁴⁾。こうした三苗の実体を解明することも、ある意味では夏華系部族が後に覇権を握り、同盟関係の長として存在する殷王朝の成立、あるいは中国の文明起源の問題に対する一つの解明の道筋になるものと考えられる。ここでは、後に覇権を握る地域主体に注目するのではなく、それと同等あるいは文化的にはそれより勝っていたとも考えられる別の地域主体の解明を行うことによって、中国文明の形成のプロセスの一端を垣間みてみようとするのである。

ところで、中国考古学はこうした文献伝承の影響を過剰に受けすぎ、本来の考古学的検討を疎かにしているとする欧米の研究者の批判が存在する⁽⁵⁾。その批判は謙虚に受けとめなければならない。ただし、その文献の過度な影響というものも、文献記載の主たる内容を作り出してきた地域の史観で形成されていたとする文献批判の立場を有しておれば、そこに必然的に文献記載の使用の限界と、活用方法が見いだされると考えられるのである。上記してきた三苗の見方は、ここでいう文献批判的な捉え方であるとするのである。

さて、ここでは、長江中流域の新石器文化にみられる城址遺跡の存在など、特異な地域的な社会発展に注目し、欧米研究者の批判に答える形で、考古学的に社会発展のプロセスを明らかにすることを目的とする。その場合、単に城址の存在やその内容を検討するだけではなく、それらを担った社会の発展法則を見いだすこととしたい。そこで、集団墓を含む墓葬構造の解明とそこから想定できる集団構

*日本社会文化専攻・比較基層文明講座

造，集落や住居構造からみられる家族集団やそれらを含む
集団構造の解明を試みることから始めたい。

2 集団墓にみられる集団構造

これから分析を進める集団墓を有する主な遺跡は，四川
省巫山大溪遺跡，湖南省安鄉縣劃城崗遺跡，湖北省鐘祥県
六合遺跡，湖北省公安県王家崗遺跡である。その他，集団
墓をなすが報告が詳細でない場合や，少数の墓の報告しか
ない場合も，併せて議論することにする。さて，上記した
4 遺跡の内，大溪遺跡は大溪文化時期，劃城崗遺跡は大溪
文化末期から石家河文化時期まで，六合遺跡は大溪文化末
期と石家河文化時期，王家崗遺跡は大溪文化末期の集団墓
を形成している。時期的に古い大溪遺跡から分析を試みて
みたい。なお，土器型式や時期区分に関しては，張緒球氏
の考え方⁽⁶⁾を基本として論を進めることにしたい。

(1) 大溪遺跡

四川省巫山大溪遺跡は，大溪文化の標識遺跡である。こ
れまで3回に渡って発掘調査がなされており，合わせて208
基の新石器時代の墓葬が発掘されている。このうち，第3
次調査の133基の墓葬は，詳細な報告がなされている⁽⁷⁾こ
とから，分析を行うことが可能である。これらの墓葬は，
層位的に下層に対応する墓葬と，上層に対応する墓葬に区
分されており，早期と晩期に区分されている。張緒球氏に
よれば，晩期墓葬は，さらに伴出する土器の型式から時期
細分が可能であり，張氏のいう大溪文化第3期と第4期に
区分できる。この観点からみれば，早期墓葬は第3期以前
とすることができ，僅かな伴出土器からみれば，第2期に
相当すると考えられるであろう。このように晩期墓はさら
に時期細分して検討しなければならないが，副葬されたす
べての土器型式が報告されていない現在，とりあえず時期
幅をもって一括して検討することにより，時期的な傾向を
読みとることが可能であろう。また，これらの墓葬の位置
関係が示されていないことも分析における大きな傷害とな
っている。幸い，出土した人骨の形質人類学的な分析がな
されているところから，墓群における性別構成や年齢構成
が明らかである。まず，これら性別，年齢構成について検
討することにする。

張緒球氏の大溪文化第2期すなわち大溪文化中期前半に
属する早期墓は，総計64基存在する。また，晩期墓は張緒
球氏の大溪文化第3・4期の大溪文化中期後半から晩期前
半にかけての墓葬である。総計61基である。表1に示すよ
うに，男性と女性の数は女性の方が多く，この傾向は晩期
墓においても同様である。こうした人骨の男女判定には，
男性判定へバイアスがかかる傾向にあるとされる⁽⁸⁾ところ
から，上記した結果は本来的に女性の埋葬数が多い傾向を

表1 大溪墓地における被葬者の年齢構成
早期墓

年齢 性別	嬰兒 0～3	児童 4～12	青年 13～24	壮年 25～39	中年 40～49	老年 50～	成年	不明	合計
男			1	2	5	8	2	3	21
女			1	3	7	3	4	9	27
不明		9						9	18

晩期墓

年齢 性別	嬰兒 0～3	児童 4～12	青年 13～24	壮年 25～39	中年 40～49	老年 50～	成年	不明	合計
男			1	1	4	1		6	13
女		2	1	3	6	9	1	8	30
不明		7				1		12	20

示していよう。この場合，墓群すべての墓葬の実体が報告
されているわけではないことから，墓葬配置における男女
の区別がある可能性もあろう。これに関する分析は不可能
であるが，実際的に女性の埋葬数が多いとすれば，自然の
男女比率からは特異な現象であり，選択的に女性や男性が
埋葬されていた可能性も考えなければならない。さらに年
齢構成に注目した場合，男性は中年や老年の死亡数が多く，
また女性も老年の死亡数が多い。この傾向は晩期墓におい
ても同様である。ところで，こうした死亡年齢は男性の場
合中年・老年にあることには比較的理解できるものである
が，女性の場合，妊娠による死亡率の高い青年の死亡数が
少ないことに，疑問がもたれる。実際，仰韶文化の例では，
中年と同様青年の女性の死亡者数が多くなっている⁽⁹⁾。し
たがって，死亡年齢構成の特異性も，ある種の選択的な埋
葬が行われていた可能性があろう。また，青年以下の埋葬
者数が少ないことも，選択的な埋葬の可能性を示す。

さて，女性の埋葬数が多い例は，華北においては認めら
れないが，長江下流域にはその例が存在し⁽¹⁰⁾，母権社会の
可能性も否定できない。また，年齢による選択的な埋葬の
可能性も存在している。ここでは，男女数や選択的埋葬傾
向から，直ちに社会構成の推定を行うことを控え，その他
の資料の増加を待つて，解釈を加えたい。

次に副葬品の構成や数量に注目する。早期墓の副葬品は，
石器や骨角器などの工具類が主体であり，土器の副葬は極
端に少ない。これに対して晩期墓は一定の土器が副葬され
るようになり，土器の副葬が葬送儀礼として普及した段階
として捉えられる。まず副葬品の個数に着目し，個数にみ
られる階層差を考えてみたい。この副葬品数の階層差を示
すため，副葬品の個数を便宜的に5個単位で区切り，性別
や児童墓における埋葬数を表すことにする。なおこの方法
は，渡辺芳郎氏が江蘇省劉林墓地の分析において既に用い

ており⁽¹¹⁾、効果的な結果を生んでいる。表2に示すように、早期墓では一定の階層分化が認められるものの、21個以上の極端に豊かな墓は比較的少なく、大半が10個以下の副葬品の墓に限られている。これに対し、晩期墓はより階層分化が進んでおり、21個以上の豊かな墓の数も増えており、副葬品の豊かな墓とそうでない墓の分化が明瞭になっていく。

表2 大溪墓地の性別と副葬品数との関係
早期墓

性別 副葬品数	男	女	子 供	不 明
0	7	8	2	
1 ～ 5	10	12	4	4
6 ～ 10	3	4	3	2
11 ～ 15	1	2		2
16 ～ 20		1		
21 ～				1

晩期墓

性別 副葬品数	男	女	子 供	不 明
0	1	7	2	3
1 ～ 5	4	11	3	7
6 ～ 10	3	5	3	
11 ～ 15	1	3		1
16 ～ 20	1	1		2
21 ～	3	3		

一方、早期墓の場合、性別の階層差あるいは豊かな墓に注目すれば、女性の墓の方が豊かな墓が多く、男女における階層差も存在する可能性がある。ところが晩期墓では、相対的に豊かな墓の比率は男性の方が多く、早期墓の傾向とは異なっている。これをもって直ちに男性の優位な関係を示すとするわけにはいかないが、同時に女性墓にも豊富な副葬品をもつ墓葬が一定程度存在することから、男女を含めた豊かな副葬品をもつ階層が存在すると見なすべきであろう。したがって、早期墓は比較的階層の分化が低い段階に対し、晩期墓の段階は、男女の別のない一定の階層分化の進展が見とれるのである。この男女の別のない豊かな副葬品をもつ階層に、仮に何らかのまとまりがあるならば、これらは上位階層としてのあるまとまりをもった集団との位置づけも可能であろう。

さて、以上にみてきたものは、副葬品の多寡をもって階層の存在を求めようとするものである。このような分析は、多くの墓地の分析例によって証明づけられるものである。その場合、大溪墓地のように墓葬の出土人骨に対する形質人類学的分析がなされているならば、性別や年齢という分析の属性が付加される。しかし長江中流域の場合、人骨が

遺存する墓葬の例は、この大溪墓地を除いて、ほとんど認められない。その場合、何らかの性別を推定できる副葬品が存在すれば、性別判定の目安になろう。次に分析を行う劃城崗墓地の場合、副葬品の石斧と紡錘車に共伴例がなく、明瞭に区別できる。無文字社会の民族例から、労働における男女の性的役割分担に注目するならば、糸を紡ぐ紡錘車は女性の労働を表し、伐採用の石斧は男性の労働を表している⁽¹²⁾。こうした男女の区別の表象としての労働用具をもって、墓葬の男女の別を推定できるかに注目されよう。大溪墓地の場合、形質人類学的に示された男女判定と、副葬品の石斧と紡錘車の対応を、表3に示してみた。ここで明らかなことは、事例は少ないものの紡錘車は必ず女性にのみ副葬されるのに対し、石斧は男性だけでなく女性にも認められることである。早期墓と晩期墓で同じような傾向が示されており、時間的な変移はなさそうである。しかも男性と女性の石斧の保有する割合は、ほぼ同じであるといえよう。このような結果からみれば、紡錘車をもつ墓葬は必ず女性の墓ということはできるものの、石斧をもつ墓は必ずしも男性の墓とは限らず、男女がほぼ均等である。そこで石斧をもつ墓は、半数の割合で男性の墓であると考えすることは可能であろう。今後の資料の扱い方として男女の区別ができない場合、石斧を保有する墓の半数を男性墓として考えることを一つの前提として、議論したい。

表3 大溪墓地における性別と副葬内容との関係
早期墓

性別 副葬品	男	女	不明
斧	8	7	4
紡錘車		1	

晩期墓

性別 副葬品	男	女	不明
斧	7	11	2
紡錘車		1	1

なお、石斧の内でも数の少ない円孔をもつ石鉞は、大溪墓地の場合、早期墓では認められず、晩期墓ではわずかに二つの墓から出土している。140号墓の場合、富裕な副葬品をもつ墓に納められており、階層的に上位者を示す威信材の可能性があるが、140号墓は青年の女性墓である。また同じく石鉞を有する99号墓は、男性墓であるが、副葬品数からは決して上位階層の墓には位置づけられない。この段階では、明確に石鉞が威信材であったことを論証できない。

(2) 劃城崗墓地

湖南省安鄉県劃城崗墓地⁽¹³⁾は層位関係から数期に渡って時期区分がなされているが、このうちまとまった墓葬が検出されているのが中一期文化遺存である。中一期文化遺存は大溪文化末期に位置づけられるもので、合計91基の墓葬が確認されている。このうち2基を除き、明確に墓域が2群に分離されている。北区墓地が57基、南区墓地が32基確

認されており、墓域間の距離は約40mを計る。図1に示すように、おそらく東西に延びる墓群が南北に2群存在していると考えられる。北区の57基のうち8基は小児棺である甕棺であり、その小児の比率は14%である。南区の32基のうち甕棺は6基あり、小児の比率は18.8%であり、2割に近い。こうした小児の割合は、集団の構成員における死亡年齢の割合に必ずしもすべてに相当しているわけではない⁽¹⁴⁾。当時の集団のすべての小児がこの墓地に埋葬されていたとは限らず、選択的な埋葬が為されていた可能性もある。また、成人墓である土壙墓には二層台はみられず、墓葬構造における階層差は認められない。

さて、これらの墓群に副葬された土器には、多少形態的

な違いが認められる場合もあり、同時存在するかが最も問題となろう。例えば、図2に示すように、北区の8号墓と南区の63号墓の副葬土器の内容を比べた場合、鼎、杯、小口罐に多少の形態差が認められるが、最も大きな形態差が認められるのが杯の形態（図2-2・5）である。したがってこれらが系統差として同時に存在するのか、それとも時期差として存在するのかが最も大きな問題となる。しかし劃城崗以外の墓葬の例でいえば、屈家嶺9号墓や12号墓⁽¹⁵⁾に、この2種類の杯が同時に副葬されている（図2）ことから、これらの杯は系統差として同時存在すると見なすことができ、劃城崗墓地の2群の墓地もほぼ同時存在すると見なしてもよいであろう。こうした場合、これらの墓

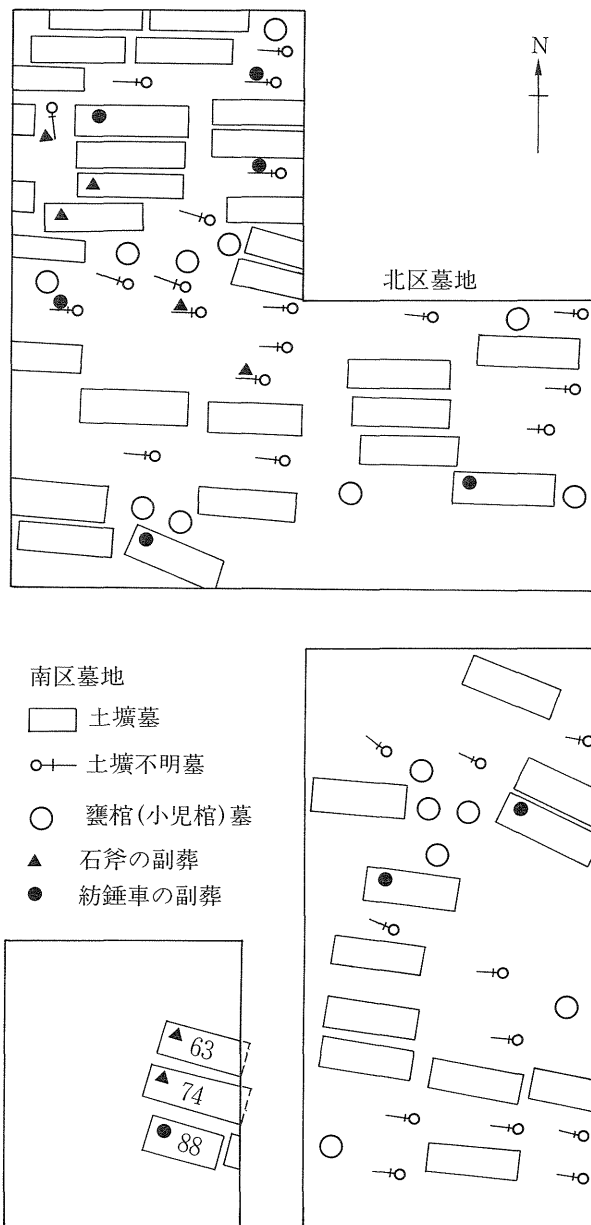


図1 湖南省安鄉縣劃城崗墓地

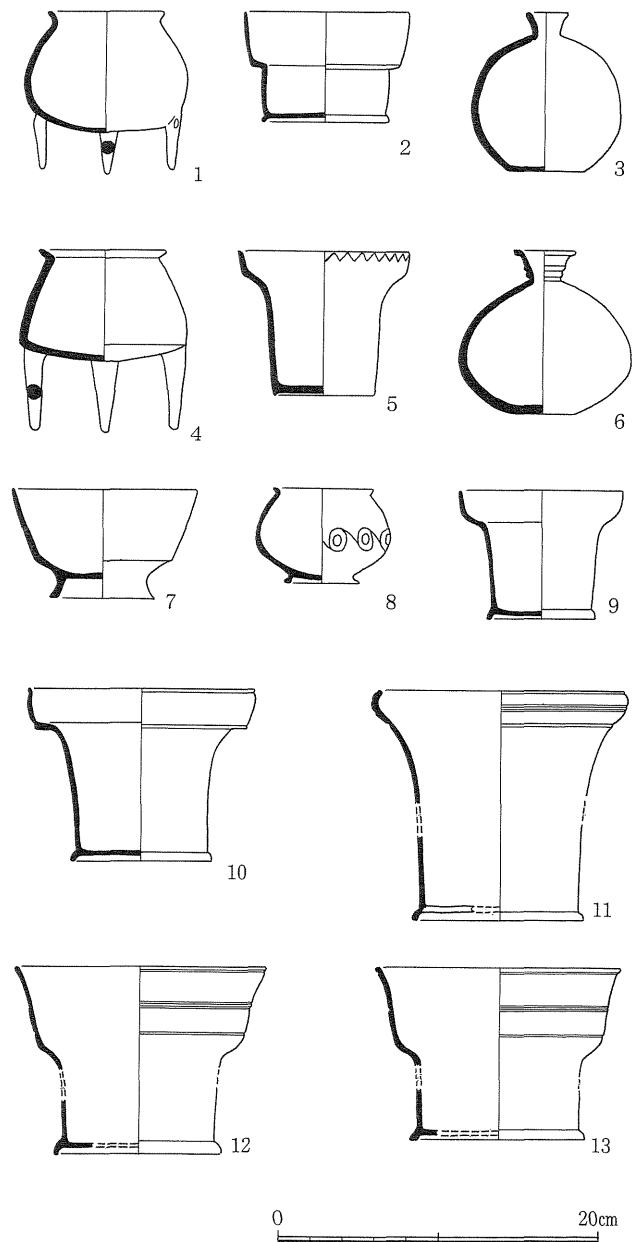


図2 劃城崗墓地と屈家嶺墓地の副葬陶器 縮尺1/5
(1～3 劃城崗M8, 4～8 劃城崗M63,
9・10 屈家嶺M9, 11～13 屈家嶺M12)

群は小児用の甕棺墓を含んで、大溪文化末期に同時存在していた二つの墓群であり、単位集団の違いを想定できよう。

これら集団墓の成人墓である土壙墓の副葬品の多寡を、大溪遺跡の場合と同じ方法で示すと図3のようになる。なお、各墓群には未発掘の墓葬も含まれており、それらを分析の対象から除外すると、北区の対象墓数は49基、南区の対象墓数は26基となり、分析総数は75基である。このような条件のもとに墓葬ごとの副葬品をみれば、副葬品の数量に差が認められ、墓葬における階層分化が示されている。同時に、副葬品の構成において、組み合わせ上、明確に区分できる遺物が認められる。副葬品のうち、石斧と紡錘車

は共存する例が認められないのである。これを性差による労働分担を代表する遺物として、ただちに男女差を示すものとして解釈するわけにはいかない。既到大溪遺跡の分析において論じたように、紡錘車は女性を示すが、石斧は必ずしもすべてが男性墓のものとは限らないという状況が存在した。ただ石斧を保有する半数の墓は男性墓であることから、半数の確率として石斧を男性墓と見なすことはできるであろう。ここで仮に石斧をもつ墓を男性墓、紡錘車をもつ墓を女性墓として、副葬品の多寡に注目してみたい。表4に示すように、男性墓、女性墓とした、性差のそれぞれにおける階層差は明確に認められる。しかし男女という性差に基づく富裕差というものは、それぞれのグループ相互の比較からも、見だし難い。したがって、この場合の階層差は、血縁家族集団のような集団単位で存在した可能性が高いであろう。そこで副葬品による階層差を、図3のように南北の墓群別にみるならば、相対的に南区の墓群の方が、副葬品の数量からいって優れている。すなわち、集落内での単位集団間に階層差が認められるのである。

呉汝祚は、南区や北区の墓群のうち、南北方向に墓が並んでいることから、南北の列を一つの墓の単位集団と見なし、南区では4群、北区では6群の単位集団が認められるとしている⁽¹⁶⁾。さらに南区における列単位の単位集団間の階層差を示し、また北区には大きな列単位での格差が認められないことから、これらを一般成因の墓群と考えている。ところで、こうした列単位を一つの単位集団と見なすべき根拠は見いだせない。また、列としての明確な規則的な配置が存在するわけではなく、その列単位の認識方法はかなり恣意的なものが認められる。そこで列単位を単位集団と把握をしないまでも、呉汝祚のいう南区の墓群内での富裕差に注目しておくべきであろう。南区での富裕な墓とは、墓群の西端に群集する63・74・88号墓である(図1)。それぞれ77個、50個、67個の副葬品をもって隣接して埋葬されており、南区・北区を通じて最も富裕な墓であり、他の墓との階層差が明確に認められるものである。この中でも63・74号墓は、石斧と同種の石鉞が副葬されている。これ

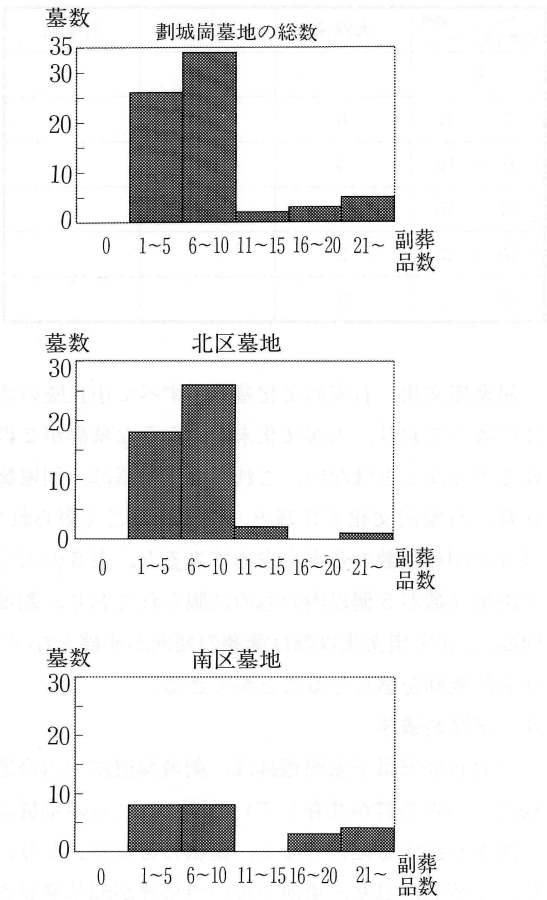


図3 劃城崗墓地の副葬品数別墓数

表4 劃城崗墓地における性別と副葬品数との対応

総数			北区墓地			南区墓地		
副葬品数	性別		副葬品数	性別		副葬品数	性別	
	男(石斧)	女(紡錘車)		男(石斧)	女(紡錘車)		男(石斧)	女(紡錘車)
0			0			0		
1 ~ 5	1	1	1 ~ 5	1	1	1 ~ 5		
6 ~ 10	3	4	6 ~ 10	3	4	6 ~ 10		
11 ~ 15	1		11 ~ 15	1		11 ~ 15		
16 ~ 20		2	16 ~ 20			16 ~ 20		2
21 ~	2	2	21 ~		1	21 ~	2	1

らの墓は、副葬品の豊かさから、被葬者が族長的な存在であったと想像できる。石鉞は他の墓からは出土しないことから、劃城崗墓地の場合、威信材として扱われていた可能性が考えられる。ところで隣接する88号墓は、紡錘車をもつことから、女性と見なされるが、副葬品は豊富であり、63・74号墓と同じく上位階層の人物である。63・74号墓の配偶者とすることもできるが、その配置からも一概に妻と認めることはできない。むしろ、これら三つの墓を血縁関係を含めた同一の家族集団と捉えるならば、この社会における最も高い階層にある家族集団として捉えることができよう。この想定は、先の性差に基づく階層差が認められないことに合致している。したがって、この段階は、家族集団の格差が広がったと同時に、大溪遺跡晩期墓と同じように、1家族集団における世襲的な族長体制が成立していた可能性が想像されるのである。

こうした階層差を、劃城崗遺跡において、大溪末期以後の時期について注目すれば、表5のようになる。報告で示された中二期墓葬が屈家嶺時期、晩期墓葬が石家河時期と考えられる。両時期とも墓葬数のごく僅かであることに問題があるが、総じて副葬品数が僅かであることに特色がある。しかも石家河時期においては、副葬品数が5個以下の墓が主体を占めており、薄葬墓が全体の主体となっている。また、男女を象徴するような副葬品も認められない。結果的には時期を追うごとに薄葬の傾向を認めることができよう。

表5 劃城崗墓地における屈家嶺・石家河文化時期の副葬品数別墓数

副葬品数 \ 時代	屈家嶺	石家河
0		
1 ～ 5	1	12
6 ～ 10	2	4
11 ～ 15		
16 ～ 20		
21 ～		

(3) 六合遺跡

湖北省鐘祥県六合遺跡では、14基の大溪文化末期の墓葬が発見されている⁽¹⁷⁾。小丘陵の斜面部の西斜面と東斜面に分かれて墓葬が発見されており、東斜面では11基、西斜面では3基の墓が検出されている。これは発掘面積が限られているため墓葬数が少ないのであり、実際の墓群は劃城崗墓地と同じように、同時期に2群が存在していた可能性が高い。また、ここの墓の特徴として、14基中7基が一次葬であり6基が二次葬であるように、比較的二次葬が多い点をあげられよう。

これら大溪末期の墓葬を、資料数が少ないことから、2群の墓群をまとめて副葬品数の多寡を比べてみると、表6のように階層分化が認められる。副葬品の構成においても石斧と紡錘車の組み合わせの別は存在するが、石斧をもつ墓が4基、紡錘車をもつ墓が1基と僅かであり、検討の要素から一応はずしておきたい。ただし、石斧をもつ墓のうち、報告で記載されている鍬すなわち石鉞をもつ墓は、7号墓では副葬品数19個、10号墓では副葬品数24個と比較的裕福な墓に位置づけられるものであり、石鉞が威信材を表している可能性は高い。

表6 六合遺跡における副葬品数別墓数

副葬品数 \ 時代	大溪末	屈家嶺	石家河
0			
1 ～ 5	6	6	3
6 ～ 10	4		
11 ～ 15			
16 ～ 20	2		
21 ～	2		

屈家嶺文化、石家河文化墓葬はすべて小丘陵の西側斜面に位置しており、大溪文化末期のような墓群が2群に分かれるようなことはない。これらの土壙墓は、屈家嶺文化で6基、石家河文化で3基と、資料数のごく限られている。試みに副葬品数の多寡を求めてみると、表6のようにすべて副葬品数が5個以内のものに限られており、劃城崗墓地同様に、屈家嶺文化以降は薄葬の傾向が明確となっており、社会的規制を感じとることができる。

(4) 王家崗遺跡

湖北省公安県王家崗遺跡は、劃城崗遺跡や六合遺跡と同様に二つの墓群が共存している⁽¹⁸⁾。これらの墓群は墓地の位置を異にするだけでなく、墓壙の方位が異なり、南北方位の東墓葬が21基、東西方位の南墓葬が53基発見されている。これらの墓群は副葬品の土器の形態から一部の墓葬が2時期に分けられ、大溪末期と屈家嶺前期のものと考えられている。ここでは、東墓葬と西墓葬の墓葬の配置が報告されていない点と、細分時期がすべての墓葬に亘って決定されていない点を鑑み、両墓群あわせて74基をまとめて大溪末期から屈家嶺前期の墓葬と見なして、それらの副葬品の多寡について検討してみたい。

表7は、これまで行ってきたと同じ方法で副葬品の多寡を比べた表である。副葬品による階層差はピラミッド構造をなし、被葬者の階層構造を示していると考えられる。王家崗遺跡においても、副葬土器以外に石斧と紡錘車の副葬がみられ、両者は2例を除いて基本的に共存しない。紡錘

車を有するものは、大溪遺跡の形質人類学的検討によっても女性墓であることは確かである。石斧は必ずしも男性を表すとは限らないが、劃城崗墓地と同じように一応男性を象徴するものとして、それぞれの副葬品の多寡を比べたものが、表7である。これからまず紡錘車をもつことで女性墓であると認められるものの中にも、明確に階層構造が分化していることが理解できる。同様に半数の確率で男性と判断される石斧を有する墓においても、階層分化が示されている。したがって、これらは性差に基づく階層構造は示されておらず、男女からなる集団単位における階層差が存在すると解釈すべきであろう。こうした結果は、大溪晩期墓や劃城崗墓地などと同じ内容を示しており、これまでの想定を追認をするものである。すなわち社会内での血縁構成を中心とする単位集団間の階層差を示していると解釈できるのである。

表7 王家崗墓地の副葬品数別墓数と性別

性別 副葬品数	総 数	男（石斧）	女（紡錘車）
0			
1 ～ 5	27	3	1
6 ～ 10	28	14	2
11 ～ 15	8	5	
16 ～ 20	6	1	2
21 ～	5	4	1

(5) その他の墓葬における分析

上記した以外の集団墓の例として、湖南省華容県車帖山遺跡の事例が存在する⁽¹⁹⁾。大溪文化から屈家嶺文化に亘る墓葬群からなり、4期に区分されている。詳細な資料が報告されていないため、各時期ごとの検討は困難であるが、屈家嶺文化の車帖山墓第3期から車帖山第4期への変化において、副葬陶器以外の石斧や紡錘車の副葬がほとんどみられなくなるという変化が認められる。これは劃城崗遺跡や六合遺跡にみられると同じような屈家嶺文化以降の薄葬化の傾向を示しているといえよう。また、大溪文化からみられた石斧のような工具を副葬する伝統が、屈家嶺文化以降減少していく傾向を示している。こうした屈家嶺文化以降の副葬品の減少という傾向は、検出されている墓葬数がかなり少ないことによる可能性もあるが、一方では大溪文化時期までにみられたものとは異なった集団体制あるいは集団における社会規制の強化を読みとることも可能のように思われる。すなわち集団規制の強化により、集団内での格差の広がりが、より一般階層の墓に対して副葬品の規制を課した可能性が考えられるのである。

ところで、石家河遺跡内での鄧家湾32号墓⁽²⁰⁾、肖家屋脊

7号墓⁽²¹⁾など石家河文化前期時期の土壌墓にも、二層台をなして多量の土器が副葬される例がある。鄧家湾32号墓の場合、被葬者は10才ぐらいの少年であるが、片刃石斧とともに40個以上の副葬土器が二層台上と棺内に分けて副葬されている。また、肖家屋脊7号墓は男性被葬者であり、墓壙は二層台の構造をなす。106個の副葬品を有しているが、土器以外に石鉞などが副葬されるように、男性首長の様相を呈している。ここで注目すべきは、このような富裕な墓が多量の土器を有しているとともに、威信材的な石鉞あるいはこの段階に少ない工具を有している点と同時に、一般の土壌墓と異なった二層台という特殊構造をなす点である。こうした場合、劃城崗・六合・車帖山遺跡の屈家嶺文化から石家河文化にみられた薄葬化は、一般階層に対する規制の強化を示すものであり、同時期の富裕墓との格差の増大からも、この段階に階層秩序の進展や階層分化がより拡大したことが解釈できるのである。したがって、大溪文化末期以来の階層構造は、石家河文化前期まで発展的に存続していたといえよう。

さらに、こうした集団内での格差の広がりは、石家河文化後期に新たに出現する大型甕棺による成人墓の出現にも認められる。この成人甕棺には、多量の玉器が副葬されており、玉器という威信材を少数の支配階層が占有化しているという事実を理解できるのである。

ところで、これまで検討してきた大溪遺跡、劃城崗遺跡、六合遺跡、車帖山遺跡の墓地は、居住遺跡に近接して作られていた。特に小丘陵を形成する遺跡は、そこが大溪文化以来連綿として続く集落遺跡であることを示しており、集落内に墓地が形成されていたことが理解できる。後に論ずる城址遺跡のうちでも、調査が進んでいる城頭山城址、走馬嶺城址、石家河城址の場合、城址内すなわち集落内に墓葬が認めれる。これに対して、石家河文化後期に出現する成人甕棺墓は、集落外に存在する可能性が高い。これらの成人甕棺墓としては、石家河遺跡群の肖家屋脊遺跡⁽²²⁾、棗林崗遺跡⁽²³⁾、六合遺跡⁽²⁴⁾などがあげられる。肖家屋脊遺跡は石家河城址の南側の城外約500mに位置しており、集落外に位置づけうる。棗林崗遺跡は成人甕棺しか認められないが、陰湘城城址から東へ約2km離れている。棗林崗遺跡の墓地に対応する居住地は遺跡周辺で今のところ発見されていないところから、仮にその居住地を一番近接している陰湘城城址と見なせば、その上位階層の墓は城外に独立して形成されたことになろう。一方、六合遺跡の成人甕棺墓は、既に論じた大溪文化から石家河文化時期の墓葬群とはやはり異なった遺跡の北側丘陵部に形成されている。したがってこの場合も、上位階層の墓は一般階層の墓とは独立した位置に形成されていると理解することができよう。こうした意味では先に論じた石家河遺跡群の肖家屋脊7号墓

という石家河前期の墓も、石家河城址外に形成されており、石家河前期時期から、特殊階層墓の立地上の独立が認められ始め、それが石家河後期の成人甕棺につながっていくと解釈できるのではないだろうか。

以上のように、屈家嶺文化から石家河文化に至る過程では、確実に階層分化の進展は認められ、支配階層の特殊化が認められる。こうした支配階層の墓は、単に副葬品や墓葬構造の格差のみではなく、次第に一般階層の墓とは分離した位置に形成されるとともに、成人甕棺のような特殊な埋葬構造を形成するようになるのである。ここに、また社会の階層分化の充実と社会進化の事実を知ることができるといえよう。

3 住居構造と集落構造

(1) 大溪文化の住居と集落

長江中流域の新石器時代において、現在最も古い文化と考えられている城背溪文化の遺跡の立地は、三峡地域などの丘陵部と江漢平原という平野部の堺の地帯に集中している。江漢平原に遺跡の分布が拡大するのは、大溪文化以降であり、比較的大きな遺跡は大溪文化、屈家嶺文化、石家河文化と連綿と一遺跡で継続する場合がみられる。この場合、遺跡は小丘陵状を呈する場合が多く、近東地域のテルの小型化したものに近いイメージが与えられる。すなわち1遺跡で長期に渡って集落が継続することによって次第に居住面が積み上げられていくことに関係があるろう。また、平野部は可耕地が発達していると同時に湖沼も発達しており、こうした水域からの防水上の効果もあって小丘陵状の遺跡立地が形成されたものと考えられる⁽²⁵⁾。

さて、大溪文化の集落構造を理解できる資料はほとんどない。住居の構造として完全な形が認められるのは、湖北省枝江県関廟山遺跡の大溪文化第3期の住居址例であろう⁽²⁶⁾。大溪文化に先立つ城背溪文化の彭頭山遺跡では円形の堅穴住居址がしられるが⁽²⁷⁾、これは地上式の方形住居である(図4)。すなわち関廟山22号住居址であり、東西約6.4m、南北約5.8mの地上式方形住居である。住居の四面は土壁からなり、床は細かな粘土で床面が貼られている。壁には柱穴がめぐるが、柱とおそらくそれに直行するように竹あるいは細木を組んで、壁土の芯としていたものと考えられている⁽²⁸⁾。これら床面や壁は焼かれることにより、強度と防湿効果を増させている。屋根は住居の周辺で発見された紅焼土から、竹や茅を組んで土で固め、焼かれたものと考えられている。住居址内部には屋根を支える柱穴と、中央に炉が存在する。このような地上式住居が、その後の屈家嶺文化や石家河文化において、主流となっている。

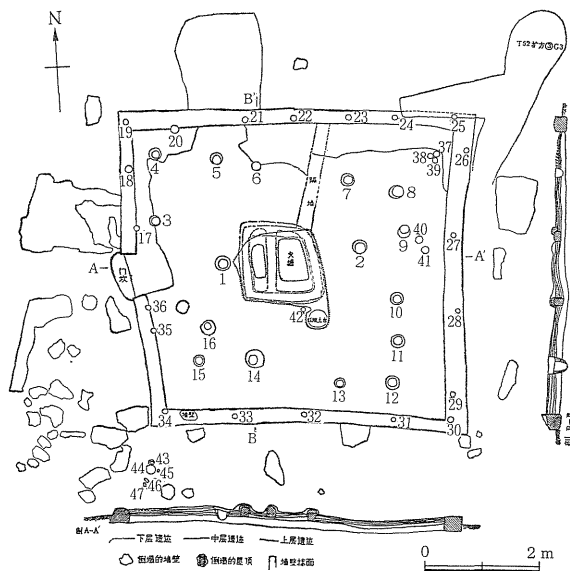


図4 関廟山遺跡出土の大溪文化の住居址平面図

(2) 屈家嶺文化の住居と集落

屈家嶺文化の集落を具体的に示す事例は、後に述べる城址を除いて意外に少ない。ここでは、河南省淅川県黄楸樹遺跡と湖北省隕県青龍泉遺跡の事例をもとに検討を加えたい。この二つの遺跡は、ともに長江中流域の文化様式の北方の周辺地域に存在し、中原地域との関連も地理的に存在する地域であり、長江中流域の典型的な事例になるかどうかにはささかの不安は拭いきれない。しかし土器様式を含めた他の属性からみても、文化様式的には明確に屈家嶺文化に属しており、中原のものとは完全に異なっている。そこで、ここでは本地域の居住域からの社会復元の好材料として、これらの資料を検討することにする。

屈家嶺文化の黄楸樹遺跡⁽²⁹⁾では、一つの方形プランの部屋の中を隔壁によって隔てて二間からなる二室家屋と、一部屋のみからなる単室家屋が認められる(図5)。二室家屋は、例えば11号住居のように、各部屋ごとに入り口と炉をもっている(図6)。各部屋の炉はそれぞれが炊事用と暖房用の機能差をもつ可能性の予想から、機能差をもった空間が組み合わさったものとする考え方も生まれよう。しかし、それぞれの部屋には、煮炊きの道具である鼎や貯蔵用の罐・甕を有するように、それぞれの部屋で食事を作れるなど、個々の生活を異にしていた可能性が認められる。すなわち二世帯の生活がなされていた可能性が高いのである。しかもその二世帯に密接な関係があることは、11号住居址の場合、隔壁の間にも入り口がもうけられていることから、明確であろう。こうした二室家屋は、11号住居址上に再構築された7号住居においても同じように、それぞれの部屋ごとに独立した炉と入り口をもっており(図7)、緊密な関連性をもった2世帯が居住していた住居と

● 鼎 ■ 罐 □ 甕 ▲ 石斧 △ 紡錘車

0 2m

推定できるのである.

ところでこうした2世帯のそれぞれの世帯の構成が婚姻家族を示すかどうかが問題となろう。11号住居の一部屋からは、男性の労働用具の象徴である石斧と、女性の労働用具の象徴である紡錘車がそれぞれ1点づつ出土している。先の大溪文化の副葬品の事例からみれば、紡錘車に女性が対応することには問題がないが、石斧に必ずしも男性が対応しているとは限らない。その論理的な欠点が存在する上で、仮に性差を代表する道具の存在を尊重して、その一部屋の空間に男女が一人づつが存在していた可能性を考えてみよう。さらにこれを仮に婚姻家族と想定するならば、二つの部屋からなるそれぞれの婚姻家族には、何らかの血縁的関連性を想像できるのである。

ところで、黄棟樹遺跡では、こうした二室家屋や単室家屋が一行列をなしてコの字状に連なっていることは(図5)、これらの世帯住居間にも密接な関連性、すなわち血縁的な類縁関係のような共同体としての原理が存在しよう。また、このコの字状に配列された住居群の内部の空閑地には、独立して単室の家屋が一軒存在する。28号住居址である。これを集団の首長の居宅とみる考え方もあるが、その身分差の割には、その家屋の規模はあまり大きくなく、普通の単室家屋と面積の大差はない。炉が認められないことから、ここで一般的な生活を送っていたとは考えられず、これらの集団の共通に使用される家屋との認識も可能であろう。特に住居群に取り込まれた内部区間には、犬が埋設された獣坑も存在し、この一軒家とともに、共同体の祭祀空間として利用されていた可能性がある。したがって、この居住配置は、血縁関係や親族関係のような集団構造を意味するか、あるいは祭祀などを共有する共同体として存在していたと考えられる。これら共同体を構成する家屋の周辺には墓葬が38基ある。このうち18基が土壇墓、20基は小児用甕棺である。これらの中には土壇墓の下部に甕棺墓がある例が3ヶ所あり、15号墓の場合は成人被葬者が女性であることから、これらは母子合葬墓である可能性がある。このように居住地に隣接して墓地を営む特色も、身分構成に大きな格差をもたない小共同体としての集落規模を物語っているよう。

一方、もう一つの事例である湖北省隕県青龍泉遺跡の屈家嶺前期の住居は、黄棟樹遺跡と同じように二つの部屋からなる二室家屋である⁽³⁰⁾。この二室家屋が群をなすかどうかは、発掘面積が少ないため不明であり、わずか1基のみの6号住居址が発見されている(図8・9)。この6号住居址の2部屋はそれぞれ入り口と部屋の中央に炉をもっている。また、それぞれの部屋で生活に使用されたと考えられる土器が認められ、一部屋ごとに世帯を異にした住居構造と考えられる。また、南室からは石鉞や片刃石斧、打製

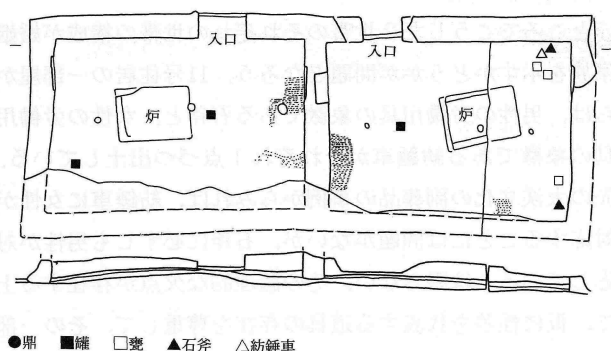


図8 青龍泉遺跡6号住居址

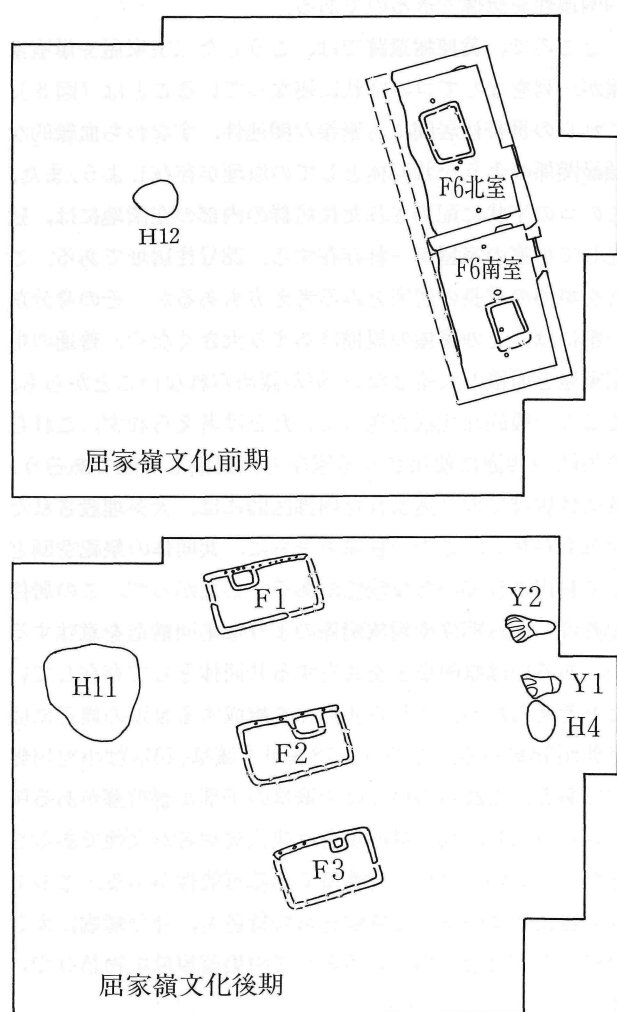


図9 青龍泉遺跡にみられる屈家嶺文化時期の住居の変遷

石斧など男性用の工具を象徴するものと、女性用工具を象徴する紡錘車が一部屋内から出土しており、黄棟樹遺跡と同様な仮定からみれば、男女からなる世帯が構成されていたと考えられる。

一方、屈家嶺晩期の住居は、単室でそれぞれの住居が分離して配置される(図9)。しかもそれぞれの住居の面積

は、屈家嶺前期の6号住居である二室家屋の一部屋分の半分以下である。これは二室家屋にみられた何らかの関連性がゆるみ、それぞれの世帯が分離した情況と解釈できよう。既に想定したように、二室家屋の関連性を血縁的紐帯によるものと解釈するならば、この紐帯がゆるみ、それぞれの家族が分離した核家族化現象を表していると考えられないだろうか。すなわち単婚家族が分離して生活していることを意味していると考えたい。これは中原の仰韶文化後半から龍山文化への核家族化現象⁽³¹⁾と対応した社会変化の想定として肯首できよう。また、大汶口文化中期後半にみられる男女合葬墓から、この時期以降、黄河下流域では父系氏族社会の開始と見なす考え方が一般的である⁽³²⁾。他地域の黄河下流域の墓制上にみられる男女合葬墓からの類推であるが、同時期の長江中流域にみられる核家族化現象を、こうした家父長的単婚家族が住居において反映された現象と考えるのも一つの考え方であると思われる。この単婚家族が家父長的であるかどうかについては、さらに詳しい実証性を必要とし、ここではひとまずこの問題は保留とし、核家族化現象が進展した事実を、単婚家族がその基本単位であると理解しておきたい。とするならば、屈家嶺前期にみられたような血縁的家族集団などを基底とした共同体的関係から、屈家嶺後期はその様相が薄まった他の集团的まとまりが想定される。これはまさしく劃城崗遺跡の墓制にみられた家族集団の世襲的首長社会から、新たな紐帯原理をもった社会組織への変化を意味しよう。すなわち、旧来の家族集団の解体と、その結果である核家族化現象による単婚家族をその社会構成の原理として、より階層化した首長社会と規定できるのである。同時に、核家族化現象が人口増を生み出した可能性を指摘できよう。

こうした社会変化が起きた段階すなわち屈家嶺文化の段階に、長江中流域ではほぼ同時期に、城壁で取り囲まれた集落、城址が出現するのである。以下にこの城址遺跡について検討していきたい。

4 城址の意義

長江中流域でこれまでに明らかとなっている城址遺跡は、湖北省天門市石家河城址⁽³³⁾、湖北省荊門市馬家垸城址⁽³⁴⁾、湖北省江陵県陰湘城城址⁽³⁵⁾、湖南省澧県城頭山城址⁽³⁶⁾、湖南省石首市走馬嶺城址⁽³⁷⁾の5ヶ所である(図10)。このほか湖南省澧県縣城遺跡⁽³⁸⁾にも城壁があるとされるが、詳しい年代や内容は不明である。ところでこうした5ヶ所の城址について、その大きさやプランについて記したのが、表8である。その規模の大きさは、中原や黄河下流域の龍山時期の城址より相対的に大きいことは既に述べたことがある。また、城壁の回りには自然河川を利用したり、新た

表8 長江中流域の城址遺跡

城 址 名	規模 (東西×南北) (m)	平面プラン	城壁底部幅 (m)	城壁高 (m)	濠 幅 (m)	所 在 地
石 家 河	1100×1200	長方形	50	6～8	80～100	湖北省天門市石家河鎮
馬 家 垸	400×600	長方形	32	5	40	湖北省荊門市劉集鄉頭靈村
陰 湘 城	570×340(500)	多角形?	46	5	45	湖北省荊沙市馬山鎮陽城村
城 頭 山	直径 325	円 形	20	3.6～5	35	湖南省澧県車溪郷南岳村
走 馬 嶺	周長 1200	不定形	?	5	30	湖北省石首市焦山河郷走馬嶺村

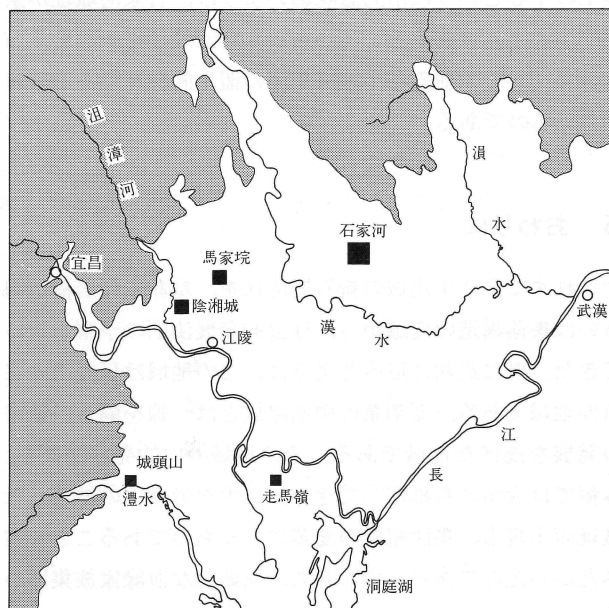


図10 城址遺跡の分布（梨地は丘陵部）

に掘削したりして濠が巡っているのも、この地域の城址の特徴である。馬家垸遺跡では、城内に河川が濠から流れ込んでおり、濠が自然河川を経由して城内と城外の交通手段になっている可能性が想定されている。また、城頭山城址の城壁形成以前の大溪文化の環濠集落の段階に、この濠すなわち環濠部分から船の櫂などの木製品の一部が発見されている⁽³⁹⁾など、濠の部分は防御機能だけでなく、交通手段としての機能性を帯びている可能性は、本地域の城址遺跡の特徴となろう。

さて、こうした城址遺跡の特徴である濠を掘り、その土で城壁を築くという大土木工事が行われた年代は、5つの城址を通じて共通しており、ほぼ屈家嶺文化の後期段階に収まる⁽⁴⁰⁾。また、陰湘城遺跡の調査でも明らかになったように⁽⁴¹⁾、濠の幅約45mを掘り、幅約46m、高さ約5mの城壁を構築する大土木工事には、相当の労働力が投下されねばならない。それを束ねる大きな力が存在したことは容易に想像できるのである。集団間にこのような力が結集する原理は、先に述べた血縁的紐帯関係を基にした集団関係から新たに発展した集団原理の基に展開したものと考えら

れるのである。そしてその社会構成の基本が、単婚家族を基にする核家族化にあることは、当然前段階より人口の増加を意味しており、それらの人口規模を収容する意味でも、これらの遺跡がかなりの面積を占めていることが理解できるのである。

石家河城址の人口推定に、仰韶文化半坡類型の陝西省臨潼県姜寨遺跡の環濠集落の推定人口450～600人を基に、面積比で拡大したものがある⁽⁴²⁾。それによれば22500～30000人という。これが事実ならば、まさに大都市がその段階に既に存在したことになる。ただし姜寨遺跡の人口推定の確実性も問題であろう。また、石家河城址の人口密度がこれほど高いものとみてよいのかという反論もよう。城址内での空間利用は多様であり、これほど多い人口規模に達していなかったと想像される。しかしこれほどまでに人口が多くなかったにしろ、屈家嶺文化段階は、大溪文化段階に比べ人口は増加したであろう。そしてまた、屈家嶺文化段階の卵殻黒陶の盛行は、前段階の轆轤技術の導入を含めて、特殊な技能を要することは間違いなく、土器作りにおいても一部専門化が始まっていた可能性を想定できる⁽⁴³⁾。陰湘城城址においても遺跡西北部が生産地区である可能性が強く⁽⁴⁴⁾、集落内部での専門集団が生まれていた可能性は高い。こうした社会的背景に、屈家嶺時期の城址が出現したといえるのである。既に論じたように、この段階には原始的な出自集団単位の階層差から、より高度に拡散した階層システムが成立していたと考えられる。そしてまた、血族単位の階層差が生んでいた家族単位の社会システムに、新たな単婚家族を母体とする社会単位の成立が階層システムに付加され、人口基盤の広がりが見いだされる。さらに自己消費社会から、卵殻黒陶の製作などにみられる特殊専門集団の成立など、社会の分業化が開始されているのである。こうした複雑な社会システムが成立した段階において初めて、巨大な土木量を必要とする城址の建設が可能となったと考えられるのである。

さて、城址遺跡は環濠集落と違い、城壁を形成することに最大の意義がある。この場合、城壁の存在は、他集団との戦争に備えた防御施設の意味が存在しよう。これは屈家

嶺時期以降の石鏃の武器化と対応して考えてみることもできる⁽⁴⁵⁾。ただこの場合、集団間の戦争が盛んであったとするならば、現在発見されている城址間の距離があまりに離れすぎているように思われる。最も近い陰湘城城址と馬家垸城址で直線距離が約50kmあり、戦略上の基点として城郭が存在するとすれば、その間にもっと多くの城址が存在しているはずである。

また、城壁については別の利点も存在しよう。中堡島遺跡や大溪遺跡の水成堆積層から洪水が頻繁に発生していたと推定されているように⁽⁴⁶⁾、大溪文化後期には河川の氾濫は事実として存在したであろう。既に指摘しているように遺跡の立地が小丘陵状を呈しているのも、こうした自然環境を背景としていよう。したがって洪水から集落を守る堤防としての役割を城壁に与えることもできよう⁽⁴⁷⁾。すなわち治水上の意義である。ただ、城壁が出現する屈家嶺後期の時期は、古気候学的には温暖湿潤なヒブササーマル期が終わり、乾燥化が始まる時期である⁽⁴⁸⁾。そこに矛盾が存在するものの、こうした段階でも現在がそうであるように洪水は生じた可能性があり、城壁の治水上の効果は引き続き存在しよう。

以上に述べた二つの城壁の機能性は、どちらに力点が置かれて城址が形成されたのか、決定しがたい。むしろ、膨大な労働力が集中するような社会組織が成立していたことが十分条件であって、城址を作り上げる動機すなわち必要条件として、戦争や治水が存在したとすることができよう。

ところで、屈家嶺文化時期から石家河文化時期に存続する城址遺跡は、これら文化圏の小地域文化単位の中心に位置する集落としても位置づけうる。現状の城址遺跡の発見例からすれば、城址が群集して存在する内蒙古中南部・東部地区の老虎山2期や夏家店下層の石城⁽⁴⁹⁾、あるいは黄河下流域の龍山時期の城址のような分布状態⁽⁵⁰⁾とは違い、図10にも示すように、個々の分布間距離はかなり離れている。すなわち小地域文化単位に一つの割合で城址遺跡が存在している。さらに城址の平面プランを大きさ別にみれば、大きく三つに区分できよう。1辺1000m以上の石家河城址、1辺500m前後の馬家垸・陰湘城城址⁽⁵¹⁾、1辺300m前後の城頭山・走馬嶺城址である。すなわち、石家河城址が最も大きく盟主的な存在であり、それに続く形で、馬家垸城址、陰湘城城址クラスが存在し、その下部の階層として城頭山城址、走馬嶺城址が位置する。まさしくこの段階の小地域文化単位の階層化を示すものとも考えられるのである⁽⁵²⁾。屈家嶺文化という一文化圏での小地域単位すなわち地域集団の相対的な優劣関係を示している可能性もある。したがって城址の出現段階は、地域集団内部での集団組織の変化とともに、地域集団間の階層化あるいは序列化が決定された社会であったということができよう。そして屈家嶺文化とい

う一つのコミュニケーション社会において、このような地域集団間の同盟関係が存在したと想像されるのである。その意味で、石家河文化時期にみられる小動物塑像が各地でみられるのも⁽⁵³⁾、同じ祭祀形態を共有した結果であろう。その中でも石家河城址の鄧家湾遺跡ではこうした小動物塑像が多量に出土しており、石家河城址の三房湾の多量の小型杯の出土と同じように、石家河城址が祭祀上のセンターであった可能性も高いであろう。先に同盟関係と想定したのも、こうした祭祀の中心が石家河城址にあり、単なる規模上の中心という政治的意味あいよりは、石家河城址が祭祀の中心とみなせるところから、石家河城址を中心とする地域集団がその他の各小地域集団の盟主的存在であると考えられるのである。

5 おわりに

これまで長江中流域の新石器時代を、墓葬や住居構造あるいは集落構造の変遷から、社会的発展法則の予察を行ってきた。既に最初に述べたように、この地域は伝説上の三苗の地域である。夏華系の中原諸族とは一線を隔し、独自の発展を遂げた地域である。その地域の内的発展法則を、本稿では大胆にも推定してきた。巨大な労働力の結集した城址の出現も、集団組織の変革に伴うものであることを述べたかったのである。すなわち、原始的な血縁家族集団から、血縁家族集団の解体、そして核家族化現象にみられる単婚家族の集団組織上の単位化というプロセスが、社会の階層化へ複雑に絡んでいったといえよう。階層社会の基盤が、血縁家族集団単位からさらに進んで、社会内部での專業集団の成立など複雑な組織化が進んでいったことが想定できる。そうした集団の複雑な組織体制とともに、その組織の一体化として、血縁的共同体から、祭祀を共有する共同体へと変化していったのである。最後に述べた文化様式内での小地域単位での階層化は、当然社会内部での階層化に対応する、よりマクロな階層化を示しているといえる。ただその階層化の紐帯として予想できるものは、共通の文化様式やコミュニケーションを共有しようとする祭祀的なまとまりであり、外見的には同盟関係としての関係性であったと思われる。巨大な労働力が投下された城址の建設も、こうした集団組織の編成上必要なイデオロギー的側面も重視する必要がある。

さて、最後に申し添えなければならないことは、こうして発展してきた長江中流域の社会発展がさらに周辺に拡大して、より大きな文化様式の広がりやなぜみせなかったかにある。この種の議論は、一つには他地域の文化系統との関連性とその影響関係に求めねばならない。とともに、中原を中心とする二里岡文化以降の文化領域の拡大と中原が

中国世界における政治的中心となる中国文明成立の問題につきあたるが、この問題には紙面の都合上ここでは直接ふれることができない。しかしながら、この長江中流域内部での文化的系統性の消滅の原因を想定しておく必要がある。石家河文化の後、大溪文化以降連綿と続いた遺跡の立地が途絶え、遺跡の立地が従来の分布の周縁に移動している⁽⁵⁴⁾。これは石家河文化の終焉に大きな変動が生まれたからに違いない。あるいは大溪文化以降系統的に続いてきた本地域の新石器時代の系統性の終焉を意味している。

さて、石家河後期に突然にみられる支配階層における玉を副葬した大型成人甕棺の出現も、集団内での新たなイデオロギーの成立でもある。しかるにその分布は、屈家嶺文化の城址遺跡の広がりよりもはるかに小さなものとなっている。今のところ長江流域より北側の地域に限られる。これは新たな地域集団のまとまりを示す精神性において、石家河前期にまでみられたまとまりより、より小さな範囲にそのまとまりが限定された可能性が理解されよう。すなわち石家河文化の地域集団の同盟関係の縮小化を示しているのである。こうした地域集団の同盟関係の瓦解こそ、その後の石家河文化の終焉を暗示するものであり、その後の中原文化の影響ならびに中原文化の領域化をもたらしたものであろう。この動きこそ、史書にいう三苗の終焉に対応するものである。以上のように、ここでは単に中原勢力が三苗を支配するという安易な歴史認識を示すのではなく、長江中流域の内的な変動原因を推測してみたかったのである。そしてまたこういう内的変化の動因は、中国の文明成立の一つのプロセスを物語る可能性を秘めているように思えるのである。

注

- (1) 張緒球『長江中游新石器時代文化概論』1992年、長江中流域の新石器時代の各文化の編年については多くの論文が認められるが、ここでは基本的に張緒球氏の文化名称、編年観を採用することにする。
- (2) 『史記・五帝本紀』「三苗在江・淮・荊州，數為亂。於是舜婦而言於帝，請流工於幽陵，以變北狄，放驩兜於崇山，以變南蠻，遷三苗於三危，以變西戎，殛鯀於羽山，以變東夷。四罪而天下咸服。」、『戦国策・魏策一』「昔者三苗之居，左彭蠡之波，右洞庭之水，文山在其南，而衡山在其北。恃此險也，為政不善，而禹放逐之。」とある。これらの文献記述から、三苗と五帝の衝突は、1回目は堯と舜の段階に、2回目は舜と禹の間にあったとされる。
- (3) 宮本一夫「中国新石器時代と古代伝承」『日中文化研究』第6号 1994年
- (4) 宮本一夫「新石器時代の城址遺跡と中国の都市国家」『日本中国考古学会会報』第3号 1993年
- (5) Lothar Von Falkenhausen. 1993 On the historiographical orientation of Chinese archaeology, *Antiquity* Vol.67 No.257
- (6) 前掲注1文献
- (7) 四川省博物館「巫山大溪遺址第三次発掘」『考古学報』1981年第4期
- (8) Weiss, K. 1972 On the Systematic Bias in Skeletal Sexing, *American Journal Of Physical Anthropology* Vol.37 No.2
- (9) 宮本一夫「華北新石器時代の墓制上にみられる集団構造(1)」『史淵』第132輯 1995年
- (10) 例えば、荃澤遺跡などがその例である。(上海市文物保管委員会『荃澤』1987年)
- (11) 渡辺芳郎「劉林遺跡墓制考」『史淵』第126輯 1989年
- (12) Murdock G. P. 1965 *Comparative Data on the Division of Labor by Sex : Culture and Society*
- (13) 湖南省博物館「安鄉劃城崗新石器時代遺址」『考古学報』1983年第4期
- (14) 中橋孝博・永井昌文「寿命」『弥生文化の研究1 弥生人とその環境』1989年。これによれば、弥生人骨からの事例ではあるが、集団全体の死亡数の5～6割が未成年者であるとされる。
- (15) 屈家嶺考古発掘隊「屈家嶺遺址第三次発掘」『考古学報』1992年第1期
- (16) 吳汝祚「劃城崗遺址中一期墓地剖析」『江漢考古』1987年第1期
- (17) 荊州地区博物館・鐘祥縣博物館「鐘祥六合遺址」『江漢考古』1987年第2期
- (18) 湖北省荊州地区博物館「湖北王家崗新石器時代遺址」『考古学報』1984年第2期
- (19) 湖南省岳陽地区文物工作隊「華容車帖山新石器時代遺址第一次発掘簡報」『湖南考古輯刊』第3集 1986年
- (20) 石家河考古隊「湖北省石家河遺址群1987年発掘報告」『文物』1990年第8期
- (21) 前掲注20文献
- (22) 前掲注20文献、北京大学考古系・湖北省文物考古研究所・湖北省荊州地区博物館・石家河考古隊「石家河遺址群調査報告」『南方民族考古』第5輯 1993年
- (23) 前掲注1文献
- (24) 前掲注17文献
- (25) 宮本一夫「長江中流域の新石器文化と城址遺跡」『福岡からアジアへ3 ―環濠集落の源流を探る』1995年
- (26) 中国社会科学院考古研究所湖北工作隊「湖北枝江関廟山第二次発掘」『考古』1983年第1期
- (27) 湖南省文物考古研究所・澧縣文物管理所「湖南澧縣彭頭山新石器時代早期遺址発掘簡報」『文物』1990年第8期
- (28) 李文杰「大溪文化房屋の建築型式と工程作法」『考古与文物』1986年第4期
- (29) 長江流域期劃弁公室考古隊河南分隊「河南淅川黃棟樹遺址発掘報告」『夏華考古』1990年第3期
- (30) 中国科学院考古研究所『青龍泉与大寺』1991年
- (31) 岡村秀典「中原龍山文化の居住形態」『日本中国考古学会会報』第4号 1994年
- (32) 嚴文明「論青蓮崗文化和大汶口文化的關係」『考古学集刊』1 1980年
- (33) 北京大学考古系・湖北省文物考古研究所・湖北省荊州地区博物館・石家河考古隊「石家河遺址群調査報告」『南方民族考古』第5輯 1993年、趙輝(後藤雅彦訳)「長江中流域における新石器時代城址とその研究展望」『博古研究』第4巻第2号 1994年
- (34) 張緒球「屈家嶺文化古城の発現和初步研究」『考古』1994年第7期

- (35) 前掲注34文献, 江陵県文物局「江陵陰湘城の調査と探索」『江漢考古』1986年第1期, 岡村秀典「陰湘城遺跡の調査」『福岡からアジアへ3 — 環濠集落の源流を探る』1995年
- (36) 湖南省文物考古研究所・湖南省澧県文物管理所「澧県城頭山屈家嶺文化城址調査と試掘」『文物』1993年第12期
- (37) 前掲注34文献
- (38) 嚴文明「文明の曙光 — 長江流域における中国最古の城市と巨大建築 —」『日中文化研究』第7号 1995年
- (39) 前掲注38文献
- (40) 前掲注34文献
- (41) 岡村秀典「陰湘城遺跡の調査」『福岡からアジアへ3 — 環濠集落の源流を探る』1995年
- (42) 北京大学考古系・湖北省文物考古研究所・湖北省荊州地区博物館・石家河考古隊「石家河遺址群調査報告」『南方民族考古』第5輯 1993年
- (43) 前掲注25文献
- (44) 前掲注41文献
- (45) 前掲注4文献
- (46) 馬繼賢「關於長江三峡地区古文化遺址分布的幾個特点」『葛洲壩工程文物考古成果匯編』1992年
- (47) 湖北省荊州博物館何努氏のご教示による。
- (48) Laboratory of Quaternary Palynology and Laboratory of Radiocarbon, Kweiyang Institute of Geochemistry, Academia Sinica 1978 Development of Natural Environment in the Southern Part of Liaoning Province during the Last 10,000 Years, Scientia Sinica
- (49) 前掲注4文献
- (50) 山東省考古所聊城地区文研室「魯西發現兩組八座龍山文化城址」『文物報』1995年第4期(総第418期), これによれば10

～20kmの範囲で龍山時期の城址遺跡が群集するとのことである。

- (51) 前掲注34文献によれば, 馬家垌城址の平面形は, 400m×600mの長方形を呈するとされるが, 1995年5月に現地を訪れ, 略測した結果は各辺がさらに100m程度大きくなるものであった。また, 北側が既に破壊されている陰湘城城址も注41文献に述べられているように, 570m×500mの大きさを復元推定されている。
- (52) こうした城址遺跡を集落の階層構造の中心と見なす考え方は, 以下の黄河流域の龍山文化を扱った論攷においてもみられる。Anne P. Underhill 1994 Variation in settlement during the Longshan Period of Northern China, Asian Perspectives Vol.33 No.2
- (53) 張緒球「石家河文化的陶塑品」『江漢考古』1991年第3期
- (54) 前掲注42文献

[謝 辞]

本稿は, 「文明のクロスロードふくおか地域文化フォーラム」の事業として, 1995年3月から5月にかけて実施された日中合同調査による陰湘城遺跡の発掘調査に参加した体験に基づくものである。発掘調査への参加を慫慂された地域文化フォーラム実行委員会に感謝致します。また, 発掘調査の調査隊長をつとめられた京都大学人文科学研究所岡村秀典氏や発掘調査を共にした福岡市教育委員会の浜石哲也, 大庭康時, 加藤隆也の諸氏, さらに朝日航洋株式会社の猪島啓二氏にも感謝申し上げたい。同様に, 調査期間中様々な便宜とご教示を頂いた湖北省荊州博物館の張緒球, 劉銀徳, 何努の各先生にもお礼を述べたい。さらに日頃文献収集に協力を頂いている九州大学大学院比較社会文化研究科の溝口孝司氏と鹿児島大学法文学部の渡辺芳郎氏に感謝致します。